

# 3.11から考える 釜石 フォーラム

つながる釜石～協働  
そしてその先へ

東日本大震災から6年が経過するなか、国内外では続発する災害に呼応するように「災害ボランティアセンター」運営や「ボランティア」、「企業のCSR」などに対する社会的意識が高まっています。また、次に起こりうる大規模な災害に備えるために、被災地で培われた経験の集積や支援活動を通じて生まれた各セクターのつながりを検証し、理解を深めることが求められています。

釜石市では、社会福祉協議会をプラットホームとした各セクターによる多様な支援活動が芽吹き、現在へつながっています。本フォーラムでは釜石市において発災から現在に至るまでの様々な活動を実際に担つた方々が社会に対して、「丸ごと」還元することで、共助の可能性を見つけ出し、これから活動に資することを目的に開催されたものです。

## 復興支援者が釜石と未来を語る

かを考えました。

フォーラムにはフィリップモリスジャパン、クボタ、日本ユニシス、荒川区社会福祉協議会など多様な企業、団体が参加しました。東京での開催は各団体への感謝と支援の成果を伝えるためです。

釜石市社会福祉協議会（丸木久忠会長）主催の「3・11から考える釜石～協働、そしてその先へ」は、3月3日（4日の2日間にわたりて東京都新宿区の早稲田奉仕園スコットホールで開催されました。

東日本大震災から6年前に、同協議会と連携する民間団体や企業が、これまでの支援活動を振り返り、全体会「3・11から見えた社協と支援者の協働」や、分科会「社会福祉協議会の現実と可能性」「企業の社会的責任から共有価値を生み出すには」「サロン連絡会が生み出した被災者支援の実態とその価値」を通じて、協働の経験を今後にどう生かす



釜石市社会福祉協議会  
丸木 久忠 会長

活動から生まれた  
「つながり」「協働」の姿を伝える

丸木会長は「震災と大津波により壊滅的な被害を受け、絶望と混乱の中で全国、世界各国から温かな支援を頂き感謝申しあげますとともに、この5年間に頂いた『つながり』やその中から生まれた『協働』の形は、今後の大規模災害に有効に機能するという一念から、釜石フォーラムを開催しました」と挨拶。

未だ復興半ばの被災地ですが、「優しさ」「思いやり」「助け合いの心」で、希望に満ちあふれた釜石市の実現に向けて福祉の現場から邁進することを誓いました。



神奈川県立保健福祉大学  
顧問  
山崎 美貴子 氏

生きるとこと  
いのちと共生 その困難と悲しみ

私たちとは周囲との関係性や様々な社会サービスを用いて暮らしていく。しかし、災害は社会基盤はもとより生命や財産、生きた証までも一瞬にして奪い去り、大いなる悲しみとともに生きることの意味を私たちにつきつけてきます。職場、仕事、近隣、社会とのつながりを断ち切られ、「生きる」ということを突然奪われた時、受け止め難い深い悲しみと絶望等に襲われ、実存の問題とし

### 基調講演



#### 3.11から考える釜石フォーラム

主催／釜石市社会福祉協議会

共催／特定非営利活動法人 hands

賛／日本基督教団、日本ユニシス株式会社、フィリップモリスジャパン合同会社、立正佼成会一食平和基金

協力／荒川区社会福祉協議会、株式会社クボタ、公益財団法人日本国際交流センター、中央共同募金会、東京ボランティア・市民活動センター

後援／復興庁、釜石市、岩手県社会福祉協議会

## 3.11から見えた社協と支援者の協働

## 震災後に学んだ協働の広がりを生かす



パネリスト

伊瀬 聖子 氏

(NPO法人カリタス釜石 副理事長)



パネリスト

菊池 亮 氏

(釜石市社会福祉協議会)



パネリスト

菊池 隼 氏

(NPO hands)

協働については、お互いが組織としての責任を自覚しながら、対等な信頼関係のうえに目的を達成していく姿勢が重要となります。しかし、震災直後の社協はその立ち位置すら分からず、状況の中でも、さまざまな団体等との仕組み

協働とは異種・異質の組織が共通の社会的な目的を果たすために、それぞれの資源や特性を持ち寄り、対等の立場で協力して共に働くこと、と日本NPOセンターでは定義しています。

全体会では、協働に至るまでの経緯、協働の創り方、協働の方程式など、今後を見据えた協働の在り方について意見を交換しました。

づくりに悩みました。

ボランティア、NPO、企業などなど、それぞれの支援組織が持つ特長を認識し、得意とする活動やテーマを知り、特性が活きる仕組みを整備することが大切でした。

各団体には強みと弱みがありますが、お互いに補い合い信頼関係を醸成することで目的を達成できると思います。

釜石市社協が主体となつたプロジェクトのための協働から、プラットホームとなり、各セクターが主体となる多様な支援活動が芽吹き、現在へつながっていることが特長と思われます。一層、釜石スタイルの連携・協働の拡充を期待しています。

信頼関係は苦しみの中での思索、自分の柔軟性を磨くこと、人の誠実さに関わる力などから生まれます。困難の底に身を置いた人、不安の中で生きる人、関係性の作り方で苦しみを体験した人等に出会って、「命を愛し、命を敬い、命に仕える」と学びました。

困難を抱える被災地に通い続け、「命と生活に根源的にかかわる」「命と死に正面から取り組む」ことが私の大きなテーマとなりました。

人は悩み、傷つき、不安と葛藤、絶望を抱えて本音を吐き出せずに心を閉ざしている時、傍らにいる存在としての支えは大切な力となります。支え合い、つながり合うことは容易なことではありませんが、仲間がいるから本音を出せることが、分かち合いになります。生活再建期にあっても、被災者は混乱し、希望をみつけにくく、自分のこれからに確信ができなくなったりしています。支援の目標は利用者が自ら取り組もうとすることと一緒に探すことを通じて、学びあう、分かち合う、支え合うことが大事となります。

私は人の中にある「力」と「可能性」に出会いました。人は安心する気持ちを持つ力があること、自らの力を知りそれを大切にして動きだす人がいること、目標を持ち、励まし、支え合い、小さな達成感を持つこと。暮らしを取り戻すこととはそういうことかと思います。



コーディネーター

湯浅 誠 氏

(法政大学教授)



コメンテーター

石井 布紀子 氏

(災害ボランティア活動)  
(支援プロジェクト会議)

て人生そのものが変わってしまうのです。

困難を抱える被災地に通い続け、「命と生活に根源的にかかわる」「命と死に正面から取り組む」ことが私の大きなテーマとなりました。

人は悩み、傷つき、不安と葛藤、絶望を抱えて本音を吐き出せずに心を閉ざしている時、傍らにいる存在としての支えは大切な力となります。支え合い、つながり合うことは

東日本大震災の最前線で支援活動を行っている社会福祉協議会。社協はどのようにして現在の支援基盤を確立させ活動を行つたのか。コーディネーターに釜石とも関わりの深い社会活動家湯浅誠さんを迎えて、「協働の創り方」を紐解きました。

協働とは異種・異質の組織が共通の社会的な目的を果たすために、それぞれの資源や特性を持ち寄り、対等の立場で協力して共に働くこと、と日本NPOセンターでは定義しています。

全体会では、協働に至るまでの経緯、協働の創り方、協働の方程式など、今後を見据えた協働の在り方について意見を交換しました。

づくりに悩みました。

ボランティア、NPO、企業などなど、それぞれの支援組織が持つ特長を認識し、得意とする活動やテーマを知り、特性が活きる仕組みを整備することが大切でした。

各団体には強みと弱みがありますが、お互いに補い合い信頼関係を醸成することで目的を達成できると思います。

釜石市社協が主体となつたプロジェクトのための協働から、プラットホームとなり、各セクターが主体となる多様な支援活動が芽吹き、現在へつながっていることが特長と思われます。一層、釜石スタイルの連携・協働の拡充を期待しています。



コメンテーター

石井 布紀子 氏

(災害ボランティア活動)  
(支援プロジェクト会議)

# 釜石から見えた

「釜石から見えた」を共通のテーマに3つの分科会①社会福祉協議会②企業ボランティア、CSR・CSV③被災地におけるサロン活動が開かれ、それぞれ「社会福祉協議会の現実と可能性」「企業における被災地支援を考える」「サロン連絡会が生み出した被災者支援の実態とその価値」をテーマに、協働の経験を今後はどう生かすかを考えました。

分科会終了後はクロージング全体会（まとめセッション）として、各分科会で出された未来への種を共有し、フォーラムの目的でもある次への大規模災害への備えとして参加者と確認しました。

各分科会の要約をお伝えします。

都築光一氏をコーディネーターとしてパネリスト3氏が参加。大規模災害時の社協活動の役割と機能を再認識しながら、その可能性を探りました。

大震災により様々な関係性が変わりました。釜石市社協復興支援部門によると震災発生直後、災害ボランティア支援プロジェクト会議（企業、社協、NPO、共同募金会）が協働するネットワーク組織。災害ボランティア活動の環境整備をめぐし、人材・資源・物資・

外郭支援については釜石市と友好都市である荒川区が、従来の枠進められています。

## 分科会① 社会福祉協議会

### 社会福祉協議会の現実と可能性



園崎秀治氏



都築光一氏



藤田満幸氏

大震災により様々な関係性が変わりました。釜石市社協復興支援部門によると震災発生直後、災害ボランティア支援プロジェクト会議（企業、社協、NPO、共同募金会）が協働するネットワーク組織。

外郭支援については釜石市と友好都市である荒川区が、従来の枠進められています。

### 震災を経た釜石市社会福祉協議会

#### 失ったもの

- 大切な職場の仲間
- 慣れ親しんだ施設や車
- 震災以前の日常



#### 得たもの

- 復興支援活動を通じて、住民からの信頼、認知度がアップした
- 行政ともこれまで以上に協働する場面が増え、信頼感・期待感が増している
- 復興支援活動から地域福祉活動への発展のチャンス
- 岩手県内外の社協や外部支援者・組織・つながり→ネットワーク
- ビジョン・使命・価値を再発見

## 分科会① 社会福祉協議会

### コーディネーター

都築光一氏  
(東北福祉大学教授)

### パネリスト

園崎秀治氏  
(全国社会福祉協議会)  
菊池亮氏  
(釜石市社会福祉協議会)  
藤田満幸氏 (前荒川区社会福祉協議会局長)



## 分科会② 企業ボランティア、CSR・CSV

### コーディネーター

枝見太朗氏  
(富士福財団理事長)

### パネリスト

勝又英子氏  
(日本国際交流センター  
事務局長)

井上哲氏  
(フィリップモリスジャパン(同)副社長)  
服部竜一氏  
(㈱クボタCSR企画部サステナビリティグループ長)  
内海裕介氏  
(日本ユニシス㈱ファイナンシャル事務部エコビジネス推進)



## 分科会③ 被災地におけるサロン活動

### コーディネーター

右京昌久氏  
(岩手県社会福祉協議会)

### パネリスト

宮下俊哉氏  
(災害ボランティア活動  
支援プロジェクト会議)  
山崎強氏  
(釜石市復興推進本部生活支援室)  
佐々木ムツ子氏 (ハートフル釜石)  
高野桂子氏 (NPOカリスト釜石)  
保科和市氏 (前立正校成会社会貢献グループ次長)  
高橋和義氏 (釜石市社会福祉協議会)



### 分科会③ 被災地におけるサロン活動

## サロン連絡会が生み出した被災者支援の実態とその価値



佐々木 ムツ子 氏



右京 昌久 氏



高野 桂子 氏



宮下 俊哉 氏



保科 和市 氏



高橋 和義 氏

右京昌久氏をコーディネーターにパネリストとして4つの団体（ファイリップモリス、クボタ、日本ユニシス、日本国際交流センター）が参加。バブル崩壊後に企業の社会的責任を果たさなければならないと言葉の風潮が生まれました。一定の大

右京昌久氏をコーディネーターにパネリストとして5つの団体が参加。傷ついた被災者に手法としてサロンを行うに当たって、多くの宗教関係者が支援に駆けつけました。社協がつくったサロン連絡会議という円卓会議が円滑な支援活動を生みました。NPOカリタス釜石は社協ができなくなりつた。支援活動の中で独自に解決できない問題も解決へたのがサロン連絡会議で、最終的に

ハウを転化し、自立性を高め、担い手としての活動を行うという手助けでした。災害は心的外傷を大きく受け対象であり、心の傷をもつた方々が靈的な存在に救いを求めることが必要で、宗教の助けが多くなりました。個別の布教活動ではないと会議で認識されました。

この後、サロン活動でコミュニティを形成していく中で、支援者と受援者の境がなく、安定したコミュニケーションの中で住民の力が付いていること、一緒に成長してきたことを感じます。

### 分科会② 企業における被災地支援を考える

## 企業の社会的責任から共有価値を生み出すには



井上 哲 氏



枝見 太朗 氏



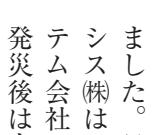
服部 龍一 氏



勝又 英子 氏



内海 裕介 氏



高橋 和義 氏

枝見太朗氏をコーディネーターにパネリストとして4つの団体（ファイリップモリス、クボタ、日本ユニシス、日本国際交流センター）が参加。バブル崩壊後に企業の社会的責任を果たさなければならないと言葉の風潮が生まれました。一定の大

右京昌久氏をコーディネーターにパネリストとして5つの団体が参加。傷ついた被災者に手法としてサロンを行うに当たって、多くの宗教関係者が支援に駆けつけました。社協がつくったサロン連絡会議という円卓会議が円滑な支援活動を生みました。NPOカリタス釜石は社協ができなくなりつた。支援活動の中で独自に解決できない問題も解決へたのがサロン連絡会議で、最終的に

ハウを転化し、自立性を高め、担い手としての活動を行うという手助けでした。災害は心的外傷を大きく受け対象であり、心の傷をもつた方々が靈的な存在に救いを求めることが必要で、宗教の助けが多くなりました。個別の布教活動ではないと会議で認識されました。

この後、サロン活動でコミュニティを形成していく中で、支援者と受援者の境がなく、安定したコミュニケーションの中で住民の力が付いていること、一緒に成長してきたことを感じます。

### 震災後の釜石市社協の動き（平成 28 年度）

街の様子	復興支援部門	総務部門（復興支援部門以外）
<ul style="list-style-type: none"> <li>東部地区を中心に復興公営住宅の完成、入居がピーク</li> <li>岩手缶詰㈱の新工場稼働</li> <li>岩手国体の一部競技が市内でも開催</li> <li>天皇皇后陛下ご訪問</li> <li>鶴住居地区生活応援センター移転新築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>復興公営住宅での交流会開催、自治会形成支援</li> <li>住民主体の課題解決支援</li> <li>地域福祉活動計画の策定</li> <li>被災者支援 DB の本格稼働</li> <li>お茶っこサロン、関係団体による連絡会開催</li> <li>VC 繼続実施</li> <li>生活支援相談員は引き続き仮設住宅、復興公営住宅等への訪問支援、サロン開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>法人創立 50 周年</li> <li>50 周年記念社会福祉大会</li> <li>大槌町の生活困窮者自立支援事業を受託</li> <li>通常業務</li> <li>復興支援関係事業の事務</li> <li>基幹職員会議を毎月開催</li> <li>介護保険事業の経営が回復。今年度は黒字見込</li> <li>今年度末に鶴住居児童館が新しい施設（学校併設）に移転</li> </ul>

### これから

- 復興公営住宅は平成 30 年度までに完成予定。
  - 被災地域での嵩上げ工事（宅地の造成等）は、遅れながらも現在進行中→地域コミュニティづくりはこれから本番。
  - 仮設住宅の集約化も並行して進む。一方、再建先が決められない方も→関係者と協働し合い、寄り添いながら支援。
  - 今後さらに人口減少、超少子高齢化が進む→持続可能な地域づくりのため、支え合いの重要性はますます高まる。
- 地域福祉推進の中核組織として、役割を果たしていきたい。